（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　相原佳之

本論文は、清朝中期の乾隆年間（1736－1795）を中心として、清代中国の森林政策を環境史的な視点から考察したものである。清代の環境問題については、近年研究が活発化しており、森林政策を扱った研究も増加しつつあるが、本論文の特色は、著者が新しく発掘した一次史料に基づき、国家の木材調達制度、在地での木材調達の実態、木材調達の中心地域での林業経営、国家の植樹政策、といった複数の角度から多面的な検討を行なっている点にある。主要な新史料としては、第一に、北京の中国第一歴史檔案館や台北の故宮博物院に所蔵された清代の公文書のうち、木材調達制度に関わる工部（土木事業担当部局）関係文書及び森林政策に関する題本などの上奏文があり、第二に、西南中国の林業地域であった貴州東南部において清朝の木材調達を現場で担当した官吏の残した手書きの活動記録『採運皇木案牘』がある。そのほか、近年急速に整理が進み学界の注目を集めている貴州少数民族地区の林業関係契約文書類も、十分に活用されている。

内容は五章に分かれる。第一章では、清朝の木材調達制度の形成、及び木材資源の不足に伴う制度の変遷過程を工部関係文書に即して概観し、第二章では、『採運皇木案牘』を中心として、木材調達担当官吏と現地の仲介者、民間商人などとの取引の状況を克明に分析する。第三章は、大量の契約文書を用い、貴州東南部の林業経営の一般的方式を概観するとともに、数箇所の山場における土地や股分（木材売却利益配当権）の売買履歴を辿り、具体的な経営の多様なあり方を解明する。第四章・第五章は、18 世紀半ばの官僚呉鵬南の植樹政策振興の上奏をきっかけに皇帝が全国各省の地方官に諮問する形で行なわれた林業状況調査をとりあげ、全国各地における無主の山地の利用状況や木材需給の動向、地方官の林業観の相違などを分析する。特に、第二章、第三章は、木材の生産と流通の状況を特定地域に即して具体的に明らかにしており、従来の研究を大きく深化させた独自性のある成果ということができる。官吏の木材調達の請負的性格、官吏個人の私的売買による利益追求、公・私を総合した細かい利益・リスク計算、といった点は、木材調達に止まらず、清代中国の財政構造の特質の一表現としてとらえることができ、また、林業経営における証券化された股分売買と具体的な樹木に即した売買との選択といった点は、林業独自の観点から清代契約関係の研究を豊富化するものであるといえよう。

木材調達の分析と植樹政策の分析とを包括する総合的結論が十分に明確に提出されていないこと、環境史的視点からの森林政策の考察がやや表面的に止まっていること、比較史的な視点が提起されながら十分に深められていないこと、など、今後に残された課題もあるが、一次史料を活用して清代の木材調達制度・森林政策を実証的に検討した労作と評価することができる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するとの結論に達した。